

しまめぐり
嶋廻遺跡

西都簡易裁判所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

しまめぐり
嶋廻遺跡

西都簡易裁判所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県埋蔵文化財センター



鳴海遺跡遠景（南東から）

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しましては、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、西都簡易裁判所建設に伴い、鳩廻遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、古代から中世にかけての遺跡であることが確認されました。本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心から謝意を表します。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野剛

例　　言

- 1 本書は、西都簡易裁判所建設に伴い、宮崎県教育委員会が行った鶴廻遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成11年7月9日から平成11年8月27日まで行った。
- 4 現地での実測・写真撮影等の記録は、南正覚雅士が行った。
- 5 空中写真撮影は、(株)スカイサーベイに、プラント・オバール分析は株古環境研究所に委託した。
- 6 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
図面の作成・実測・トレース・写真撮影等は南正覚が整理作業員の協力を得て行った。
- 7 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成し、調査範囲図は西都市
都市計画図の1万分の1図を基に作成した。
- 8 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修)に
掲った。
- 9 本書で使用した方位は、座標北(座標第Ⅱ系)である。レベルは海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した造構略号は次の通りである。
S C . . . 土坑 S E . . . 溝状造構
- 11 本書の執筆及び編集は南正覚が行った。
- 12 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センター(佐土原町大字下那珂4019番地)に保管し
てある。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 調査の概要	
第1節 遺跡の位置と環境	2
第2節 調査の経過	4
第3節 基本層序	5
第Ⅲ章 調査の記録	
第1節 遺構	8
第2節 遺物	10
第Ⅳ章 自然科学分析の結果	
第1節 島廻遺跡における植物珪酸体分析	15
第Ⅴ章 まとめ	22

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 発掘調査範囲図	4
第3図 北側壁土層断面図	5
第4図 第IV層上面遺構分布図および第Ⅲ・IV層出土遺物分布図	6
第5図 第V・VI層出土遺物分布図	7
第6図 溝状遺構実測図	8
第7図 土坑実測図	9
第8図 出土遺物(1)	11
第9図 出土遺物(2)	12
第10図 出土遺物(3)	13
第11図 出土遺物(4)	14
第12図 ブラント・オパール試料採取地点および分析結果	18

表目次

第1表 基本層序注記表	5
第2表 出土遺物観察表(1)	23
第3表 出土遺物観察表(2)	24
第4表 出土遺物観察表(3)	25

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成10年度の大型補正予算により西都簡易裁判所の建て替えが行われることとなった。そこで、平成10年10月、宮崎地方裁判所と県文化課の間で埋蔵文化財についての協議がなされた。同月、文化課で試掘調査を実施した結果、遺跡の所在が確認されたため、工事を実施する建設省九州地方建設局鹿児島営繕工事事務所と協議を行い、工事の影響の及ぶ200m²について平成11年度に発掘調査を行うことになった。

平成11年6月7日付けで発掘調査委託契約を締結し、現地調査は平成11年7月9日～平成11年8月27日まで実施した。この後、遺物整理を埋蔵文化財センターで行った。

第2節 調査の組織

嶋廻遺跡の調査組織は次の通りである

調査主体 宮崎県教育委員会

(平成11年度)

教 育 長	笠 山 竹 義
教 育 次 長	新 垣 隆 正
	岩 切 正 憲
文 化 課 長	仲 田 俊 彦
同 課 長 極 佐	矢 野 剛
主 幹 兼 庶 務 係 長	井 上 文 弘
埋 蔵 文 化 財 係 長	北 郷 泰 道
調 整 担 当	重 山 郁 子

(平成12年度)

教 育 長	笠 山 竹 義
教 育 次 長	福 永 孝 義
	岩 切 正 憲
文 化 課 長	黒 岩 正 博
同 課 長 極 佐	井 上 貴
主 幹 兼 庶 務 係 長	長 谷 川 勝 海
埋 蔵 文 化 財 係 長	石 川 悅 雄
調 整 担 当	飯 田 博 之

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	田 中 守
副 所 長	江 口 京 子
庶 務 係 長	兒 玉 和 昭
調 査 第 二 係 長	青 山 尚 友
主査(調査担当)	南 正 覚 雅 士

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢 野 剛
副 所 長 兼 総 務 課 長	菊 地 茂 仁
総 務 係 長	亀 井 維 子
副 所 長 兼 調 査 第 二 係 長	岩 永 哲 夫
調 査 第 三 係 長	菅 付 和 樹
調 査 第 四 係 長	永 友 良 典
主査(調査担当)	南 正 覚 雅 士

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と環境

鳩廻遺跡は、宮崎県西都市大字右松字鳩廻に所在する。

西都市は、宮崎県のはば中央部に位置する内陸都市で、山地が多く市面積の約8割が林野で占められている。西都市の地形は、西方に九州山地を背負った形容を表し、市街地の東端を南流する一つ瀬川と支流の三財川・三納川等とが沖積地の低地を潤し、豊かな農地が形成されている。

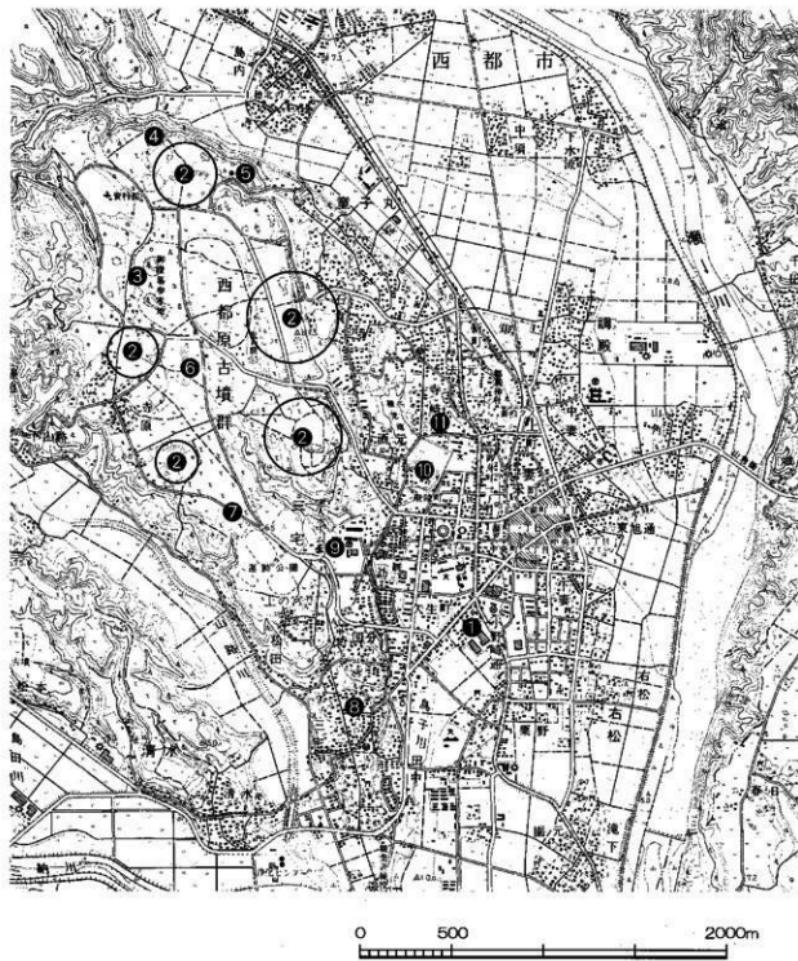
これら河川流域には、九州山地から岬様に南東へ、東へと幾条にも台地が延びていて、北方より茶臼原台地・西都原台地・百塚原台地・小豆野台地・六野原台地と大別できる。

本遺跡は、西都市街地の中心部、一つ瀬川と一つ瀬川の支流三財川・三納川に挟まれた標高約12mの沖積地に立地している。本遺跡の北西約1kmには、標高50m～80mの通称西都原と呼ばれる台地が広がる。この西都原台地には全国的に周知される特別史跡・西都原古墳群（柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基）が群在し、中央部には、特別史跡に含まれない男狹穗塚と女狹穗塚（明治28年12月4日宮内庁陵墓参考地として指定）の2基の巨大古墳が偉容を誇っている。女狹穗塚の南東50mには西都原古墳群で唯一の横穴式石室を有する鬼の窟古墳が所在し、南九州独特の埋葬形態を有する地下式横穴墓も12基確認されている。また、西都原台地の南端には產土神の三宅神社が創建している。

さらに、西都原台地には、寺原遺跡・丸山遺跡・原口遺跡・西都原遺跡（総称して西都原地区遺跡）が位置している。原口遺跡は台地南側周辺、寺原遺跡は原口遺跡の北側に、丸山遺跡は台地北側周辺、西都原遺跡は台地のはば中央部の東側周辺に位置している。これらの遺跡内からは丸山遺跡では、縄文時代早期の前平式土器及び焼窯群、原口第2遺跡からは、古墳時代後期の竪穴式住居2軒、寺原第1・第4遺跡からは、弥生時代終末の竪穴式住居3軒などが確認されている。また、同台地北東端の新立遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴式住居20軒や横穴墓群や古墳時代以降中世までの掘立柱建物跡が検出されている。

西都原台地は、回りを標高30m程の中間台地が取り囲んでいるが、その南側中間台地には奈良時代に建立された日向国分寺が位置する。また、北方600m程の県立妻高等学校敷地内は同尼寺跡と推定されている。本遺跡から北へ約800mの東側中間台地には寺崎遺跡と酒元遺跡がある。酒元遺跡の発掘調査では、古墳時代中期中葉～後葉の集落跡が検出された。さらに、その後の調査で両遺跡からは、土師器・須恵器・陶磁器等や大量の瓦、さらに回廊跡と推定される遺構や掘立柱建物跡が検出されていたが、平成10・11年度の調査により、寺崎遺跡が国史跡として確定され、歴史的にも価値のある重要な地域となっている。

このように、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡・寺崎遺跡等を含む中間台地は、古代日向国を中心的な役割を果たしてきた歴史的な環境をもつ地域であったと思われる。



- | | | |
|-----------|-----------|--------------|
| 1. 嶋廻遺跡 | 2. 西都原古墳群 | 3. 男狹穗塚・女狹穗塚 |
| 4. 丸山遺跡 | 5. 新立遺跡 | 6. 寺原遺跡 |
| 7. 原口第2遺跡 | 8. 日向國分寺跡 | 9. 日向國分尼寺跡 |
| 10. 酒元遺跡 | 11. 寺崎遺跡 | |

第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

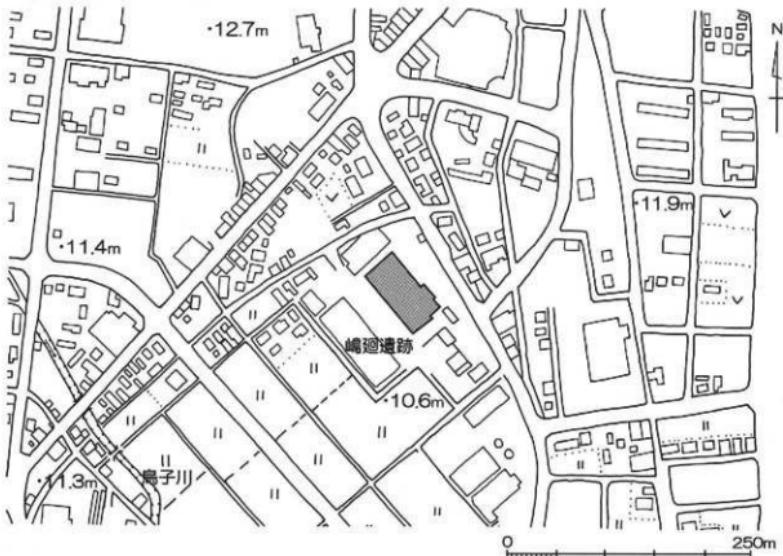
本遺跡は標高約12mの沖積地（西都平野）の低地部に位置する。

調査は裁判所が建設される部分のみの約200m²を対象地として行った。まず、土層確認のトレンチを設定し土層の堆積状況を確認し、重機により第Ⅰ層（表土）の除去を行った。しかし、調査面積が狭小のうえ裁判所が建っていた関係上、部分的に擾乱が著しく、深いところでは現地表面下1m以上の深さまで擾乱が達していたこともあり、作業は難航した。その後、人力にて排水と土層断面観察を兼ねて周囲に溝を掘削した。併せて、重機で調査区南端に集水井を設置した。湧水はじわじわと浸み出す程度で量は多くなかったが、2インチの水中ポンプを常備し排水を行った。

その後、作業員による掘り下げを行ったが、第Ⅱ・Ⅲ層からの遺物出土はほとんど見られなかつた。第Ⅳ層上面では、土坑5基、溝状遺構1条を検出した。遺物は土師器・須恵器・瓦等が出土した。第Ⅴ層からは、遺物は土師器・須恵器・陶磁器等が出土したが、遺構は検出できなかつた。その後、調査区北側の掘り下げを行つた。その結果、第Ⅵ層からも土師器・須恵器等が出土したが遺構は検出できなかつた。遺物の取り上げを行つた後、さらに掘り下げてみたが、遺構・遺物ともになく文化層とは認められず調査を終了した。

現地では記録作成のため、国土座標（XY座標）に乗じた5mグリッドを設置した。

調査は1ヶ月の短期間ではあったが、長雨や台風により、調査区全体がたびたび水没し、自然の猛威を痛感した調査であった。



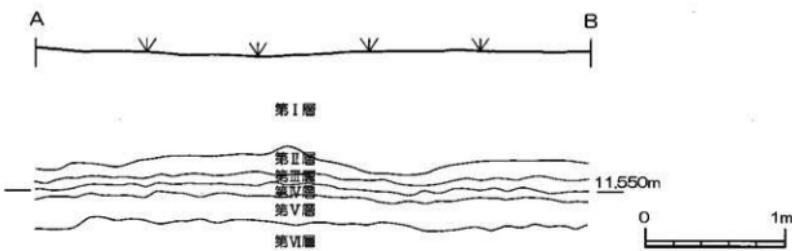
第2図 発掘調査範囲図

第3節 基本層序

鳴廻遺跡の基本層序を第3図に示した。

第I層(表土)は、大量の産業廃棄物を含んだ砂質土で、80cm前後の厚みがある。第II層は、砂粒を含んだ粘質のある灰色土である。第III層は、砂粒・小礫を含んだ粘質のある黄橙色土層である。第IV層は、砂粒・赤褐色粒(0.5cm~1cm)を含んだ粘質のある黄褐色土層である。第V層は、褐灰色粘質土を含んだ黄褐色の粘土層である。第VI層は、第V層よりさらに褐灰色粘質土を含んだ明褐色の粘土層である。

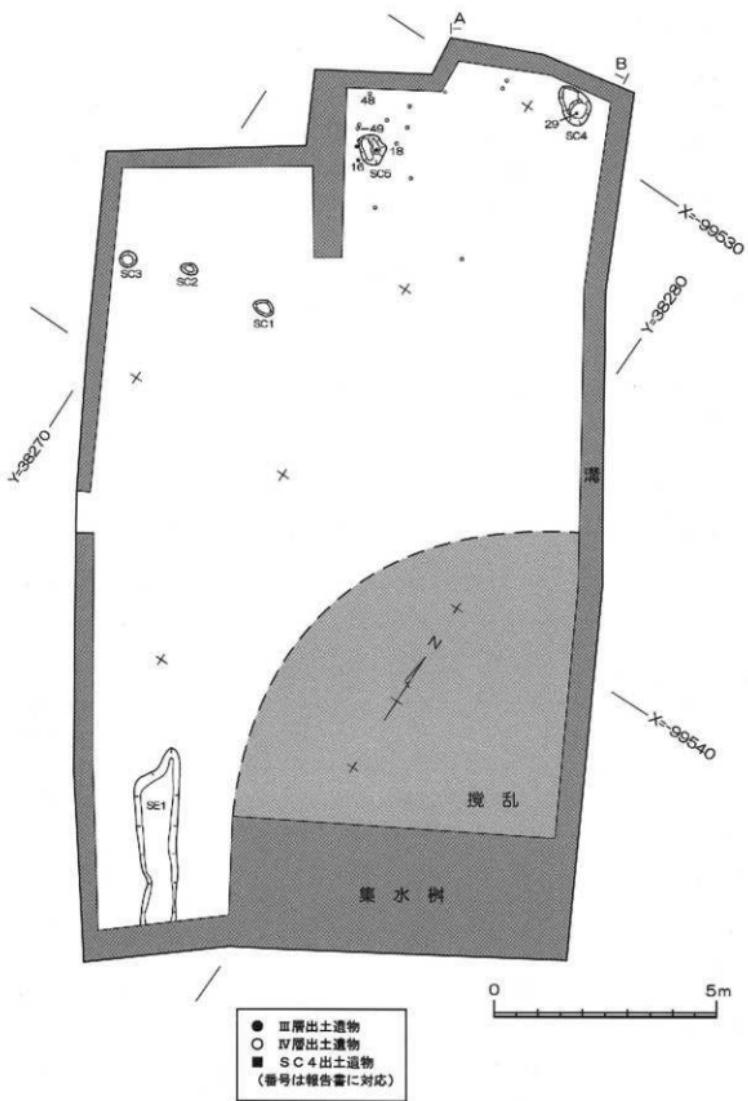
なお、鳴廻遺跡では、プラント・オパール分析を実施している。その結果については第IV章を参照されたい。



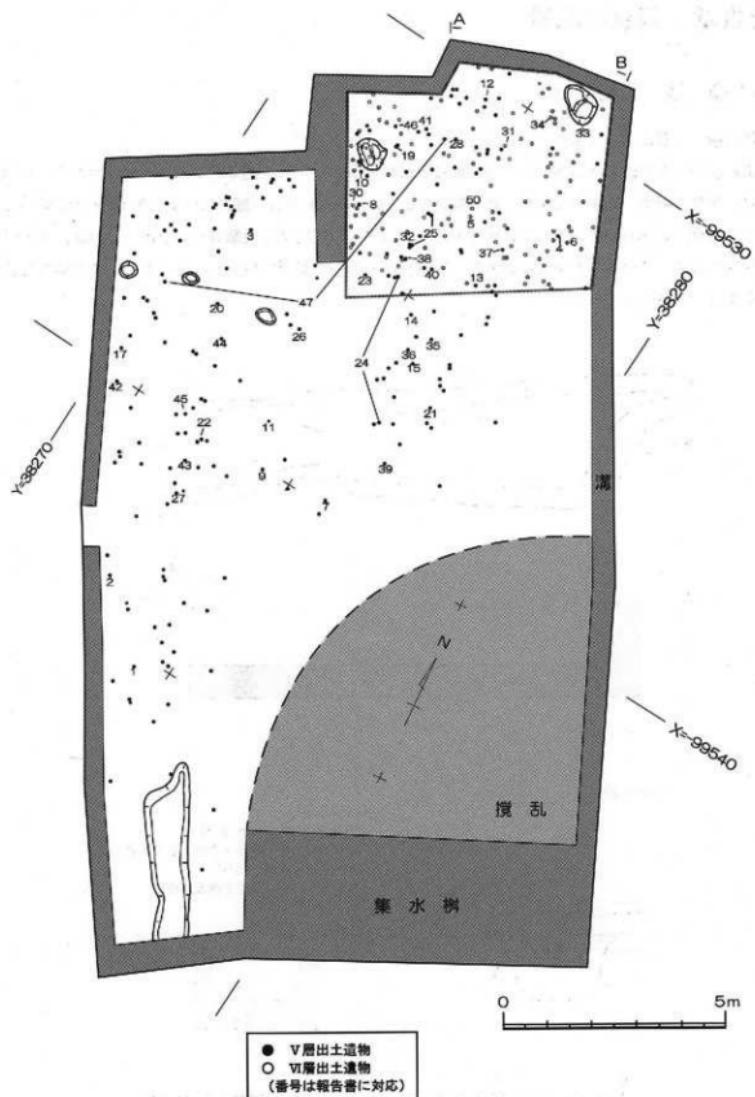
第3図 北側壁土層断面図

第1表 基本層序注記表

層序	土 色	土 質	酸化鉄	混 入 物
I	盛 土	砂		産業廃棄物
II	灰 Hue 5 Y 4/1	粘質性シルト	糸根状	砂粒
III	黄橙 Hue 10 YR 7/8	粘質性シルト	糸根状・管状	砂粒・小礫
IV	黄褐 Hue 10 YR 5/8	粘質性シルト	糸根状・管状	砂粒・赤褐色粒
V	黄褐 Hue 10 YR 5/8	粘土	糸根状・管状	褐灰色粘質土
VI	明黄褐 Hue 10 YR 6/8	粘土	糸根状	褐灰色粘質土



第4図 第IV層上面遺構分布図及び第III・IV層出土遺物分布図



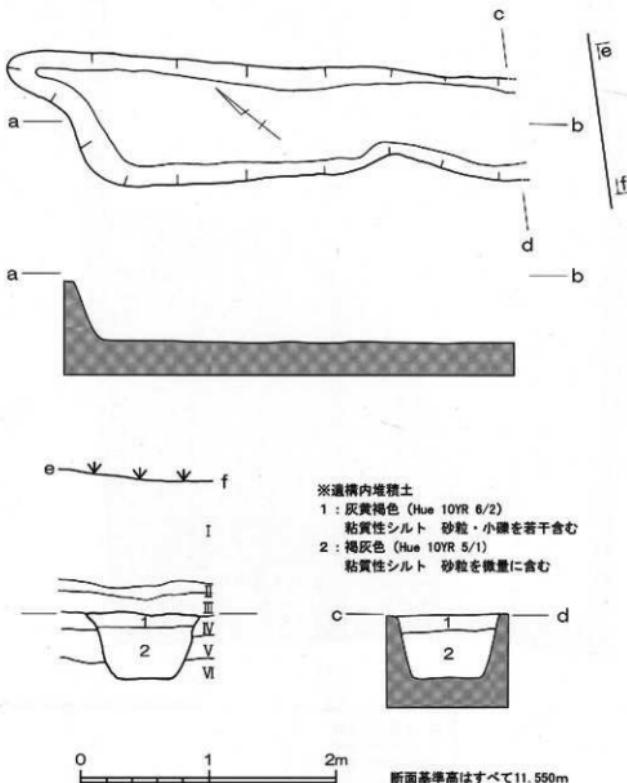
第5図 第V・VI層出土遺物分布図

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 遺構

溝状遺構 (S E 1, 第4図)

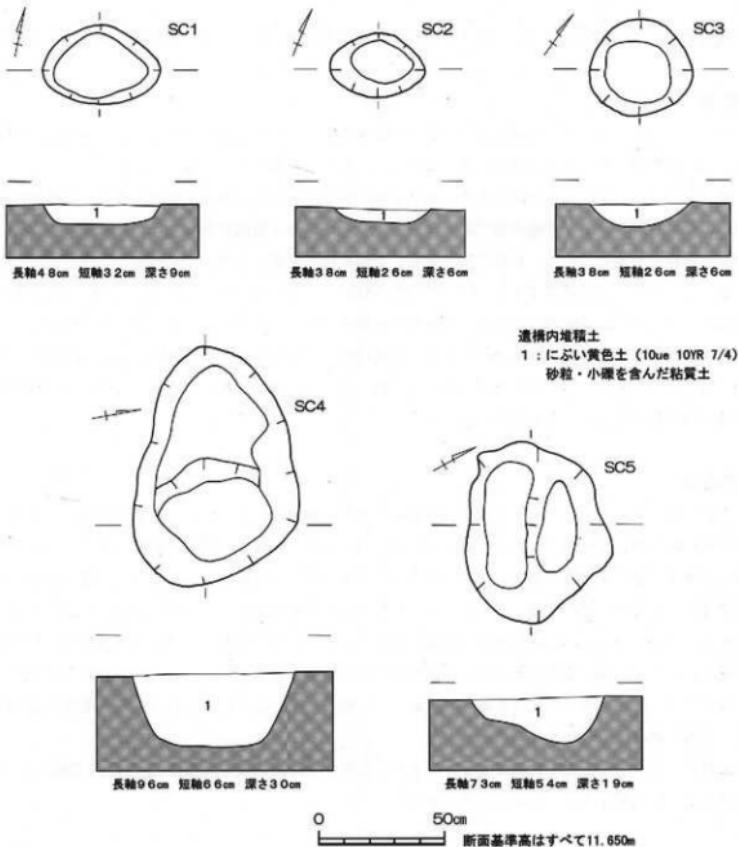
第Ⅳ層で1条の溝が検出された。検出面は黄褐色粘質土である。掘り込み面は第Ⅳ層である。北西～南東に伸びる溝で、U字形を呈し、最大幅100cm、深さ54cmを測る。底面は南東方向に僅かに傾斜していた。調査区外への伸びについては確認できなかった。遺構内より土師器が2点出土したが、水の浸食を受けて摩滅していることや底面から20～30cm程度の浮いた状態で出土したことから、この溝の時代を断定するには至らなかった。



第6図 溝状遺構実測図

土坑 (SC 1・2・3・4・5, 第4図)

第IV層で5基の土坑が検出された。検出面は黄褐色粘質土である。掘り込み面は第IV層である。5基のうち3基 (SC 1・2・3) が東西方向に隣り合い、1基 (SC 5) がすこし離れた北側に、さらに1基 (SC 4) がその東側に位置する。平面プランは円形のもの、楕円形のもの、不整形のものがある。検出面からの深さは、SC 1～3 が10cm以下、SC 4 は30cm、SC 5 は19cmである。SC 4 は第VI層中まで掘り込まれている。出土遺物は SC 4 よりの1点のみである。29は壺の胴部で調整は、外面が格子目タキ、内面はナデであり、鉄分が付着して部分的に赤褐色を呈する。SC 1～5 は検出時の状況および埋土の堆積状況から見て、ほぼ同時期に掘られたものと考えられる。



第7図 土坑実測図

第2節 遺 物

遺物は第Ⅲ層～第Ⅵ層から出土している（第4・5図）。須恵器が全体の70%，土師器が20%，東播系・陶磁器・瓦質土器・瓦・ふいごの羽口等が10%を占める。土器類は小片が多いため器形が復元できるものはない。以下、出土した遺物の記述を行う。

土 師 器

杯（1～5） 1～5いずれも底部で、回転ナデにより整形される。5はやや斜めに張る高台を持つ。

壺（6） 6は口縁部である。風化が著しく調整は不明瞭である。胎土に多量の礫を含んでいる。

須 恵 器

杯（7～13） 7～9は口縁である。7は口縁が外反し、8・9は内湾する。10～13は底部である。10・12は高台がなく、底部と体部の境に稜をもつ。11・13は輪高台である。

壺（14～16） 14・15は頸部である。14は小型の壺とみられる。横ナデ調整を施し、自然釉が見られる。15は厚手で胴上部が張る壺であるが、焼き歪みが著しく気泡がみられる。内面はナデの後に部分的に指押えを施している。16は底部である。9cm程度の平底となり、やや外反しながら胴部に続く。

壺（17～34） 17は頸部である。「く」字形に屈曲し、ヘラにより削りとられている。上方に向かって外反する。18～34は胴部片である。外面が格子目タタキによる18～21・23～27・29・30・32・34と平行タタキの22・28・31・33に分けられる。内面は22・24・25・30・32・34が同心円の当て具痕、18・20・21・23・26・28・29は当て具痕の後ナデ、19・27・31・33は平行当て具痕が見られる。胴部片は鉄分が付着して部分的に赤褐色を呈している。

中世陶磁器

青磁（35～39） 35は龍泉窯系青磁皿の底部である。体部内面に片彫花文と櫛目が施してある。底部外面は焼成前に釉を搔き取っている。12世紀中頃～後半。36は同安窯系青磁碗の体部片である。内外面に細かい継の櫛目文を有する。12世紀中頃～後半。37・38は龍泉窯系青磁碗の底部で体部内面に飛雲文ないし花文の陰刻を施してある。38は片彫りによる体部内面の5分割が見られる。ともに12世紀中頃～後半である。39は越州窯系青磁碗の底部で、蛇ノ目高台をもつ。内外面には釉の下に化粧土が施されているが、釉の剥落が著しい。体部外面中位から下位には施釉はない。8世紀末～10世紀中頃。

青花（40・41） 明の青花である。40はレンツー碗の一部と見られる。41は薄手の端反り皿の口縁で、体部に唐草文（？）が見られる。

東播系（42） 片口鉢の口縁である。大きく外反する口縁部に続き端部は上方へ強く拡張している。端部外面は黒色を呈する。12世紀中葉～後半。

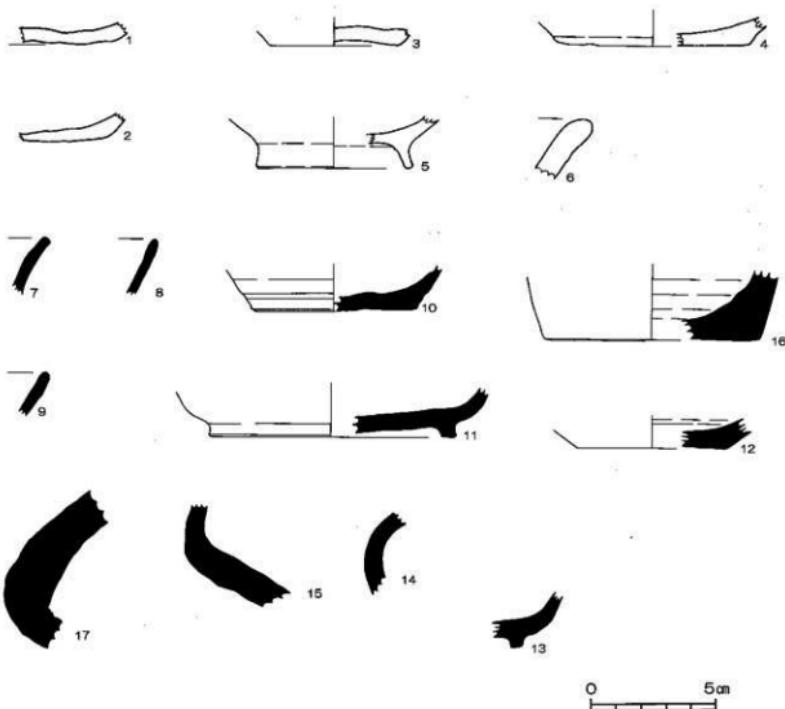
近世陶磁器他

陶磁器 (43・44) 43は肥前系(波佐見)のくらわんか手の一重網目文を施す椀の体部の下部である。44は唐津の甕の脇部で、白化粧の上に透明の施釉が見られる。

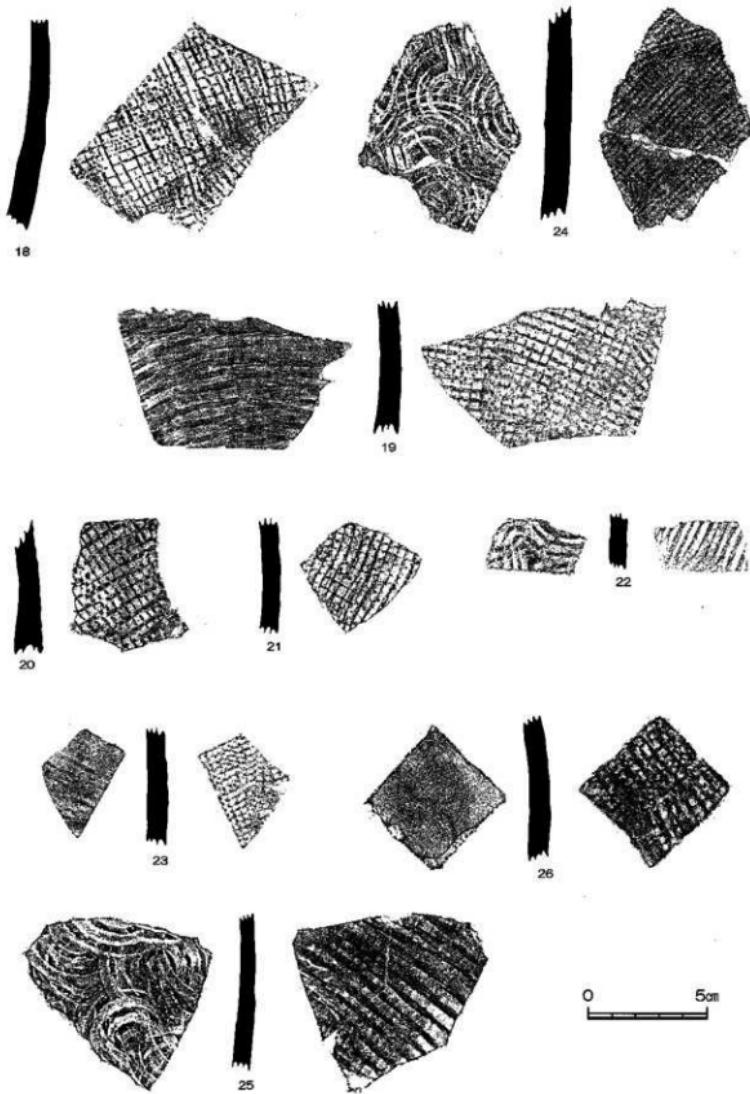
瓦質土器 (45~47) 45は焰烙の口縁である。内外面に工具による回転ナデが見られる。外面全体にススが付着する。46は鍋の口縁である。内外面に回転ナデが見られる。外面全体にススが付着する。47は羽釜の口縁である。内外面にススが付着する。

瓦 (48・49) 48は近世の瓦である。凸面は、縦方向に工具でナデを施している。凹面は布目痕を残す。49は古代の瓦である。寺崎遺跡(国衙跡)からも同様のものが出土していることから8世紀頃の瓦と考えられる。凸面は斜方向の格子目タタキが見られる。凹面は摩滅しているがナデが施されている。

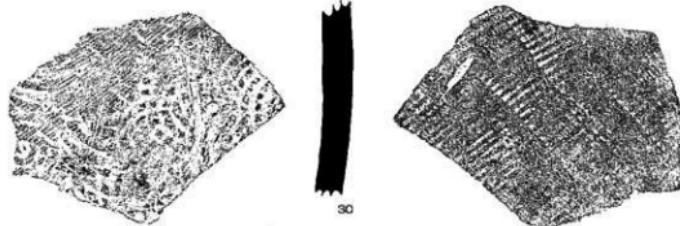
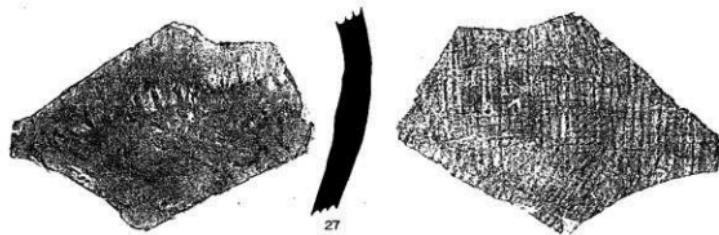
フイゴの羽口 (50) 内径1.2cm(推定)、最大径6.0cm(推定)。羽口の端部外面には鉄が付着しているほか部分的にガラス化している。



第8図 出土遺物(1)

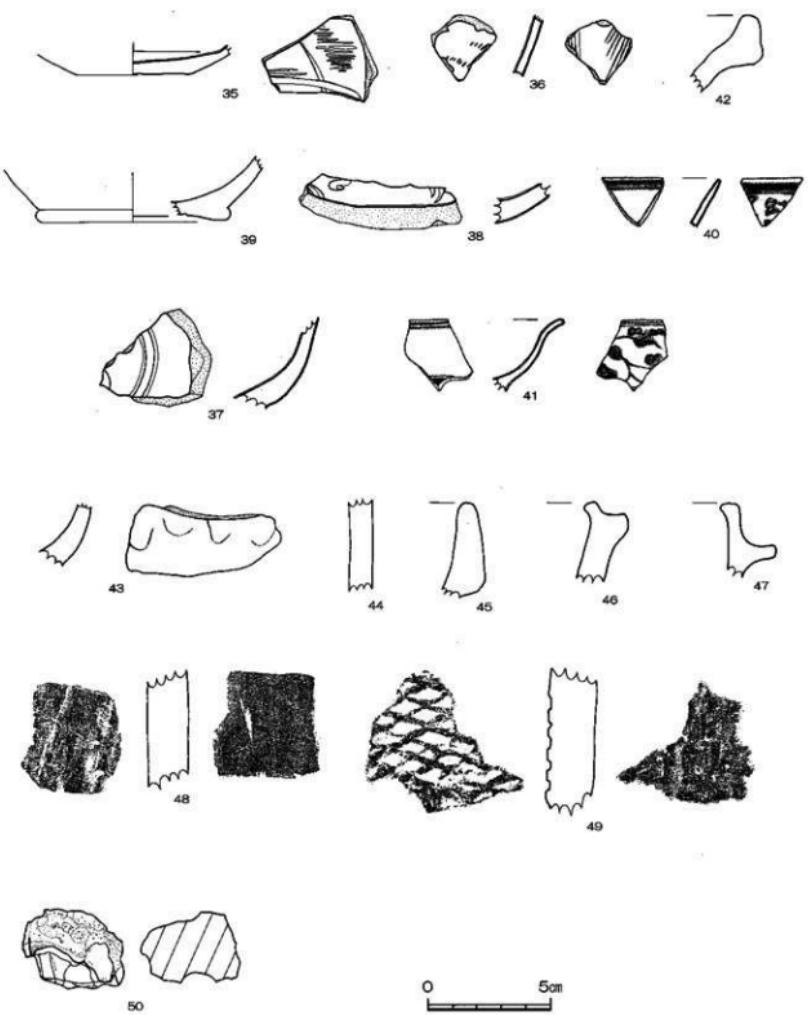


第9図 出土遺物（2）



0 5cm

第10図 出土遺物 (3)



第11図 出土遺物(4)

第IV章 自然科学分析の結果

第1節 島廻遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山、1984）。

2. 試 料

試料は、低地部のA地点とB地点およびC地点から採取された計27点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（P19参照）に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電子炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-6}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、タケア科は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ス

スキ属型、タケア科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表（P18参照）および図（P19参照）に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考 察

（1）水田跡の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールの試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) A 地点

試料1から試料7までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料5では密度が4,500個/gと比較的高い値であり、試料3から試料1にかけても3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これらの層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。試料6では密度が2,200個/gと比較的低い値であり、試料7でも80個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) B 地点

試料1から試料13までの層準について分析を行った。その結果、砂質土層の試料5と試料10を除く各試料からイネが検出された。このうち、試料7と試料12・13では、密度が1,500～2,200個/gと比較的低い値である。ただし、各層とも直上層より密度が高いことから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、各層の時期に調査地点もしくはその付近で、稻作が行われていた可能性が考えられる。その他の試料では、密度が1,000個/g前後と低い値である。

3) C 地点

試料1から試料7までの層準について分析を行った。その結果、試料7を除くすべての試料からイネが検出された。このうち、試料1では密度が5,300個/gと高い値である。したがって、同層では稻作が行われた可能性が高いと考えられる。その他の試料では、密度が1,000個/g前後と低い値である。

（2）ヒエ属型について

A地点の試料5からは、ヒエ属型が検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、現地点ではこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか、1988）。また、密度も800個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられ

るもの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに育成し、ススキ属やタケ亜科は、比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境を推定することができる。上記以外の分類群では、部分的にススキ属型やタケ亜科が少量検出されたが、ヨシ属はまったく検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると、おむねイネが優性であることが分かる。

以上のことから、調査地点もしくはその付近では継続的に稻作が行われていたと考えられ、イネ科の野・雑草はあまり見られなかつたものと推定される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、調査区南側では第Ⅱ層および第Ⅲ・Ⅳ層からイネが多量に検出されそれぞれ稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、約240cm深の粘質土層およびその上位の褐色土層などでもイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。

【参考文献】

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）

『機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追及のための基礎資料として—』
考古学と自然科学, 20, p. 81-92.

藤原宏志（1976）

『プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—』
考古学と自然科学, 9, p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）

『プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—』
考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

宮崎県西部市町郷瀬跡におけるプラント・オバール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料						B地点												
		1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	30	30	38	8	45	22	8	15	8	8	8	8	22	8	8	8	15	15	15
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type																			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type																			
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	8	15	23	8	15	38	22	23	8	8	7	7	15	15	15	8	8	15	8
		45	83	8	15	38	22	23	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15

推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

分類群	学名	地点・試料						C地点								
		1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.89	0.89	1.11	0.22	1.33	0.66	0.22	0.44	0.22	0.22	0.22	0.66	0.22	0.44	0.45
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type								0.63							
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type															
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	0.09	0.19	0.28					0.09	0.09	0.09	0.09	0.19	0.09	0.09	0.09
		0.22	0.40	0.04	0.07	0.18	0.11	0.11	0.07	0.07	0.07	0.04	0.07	0.04	0.07	0.04

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度 (単位: ×100個/g)

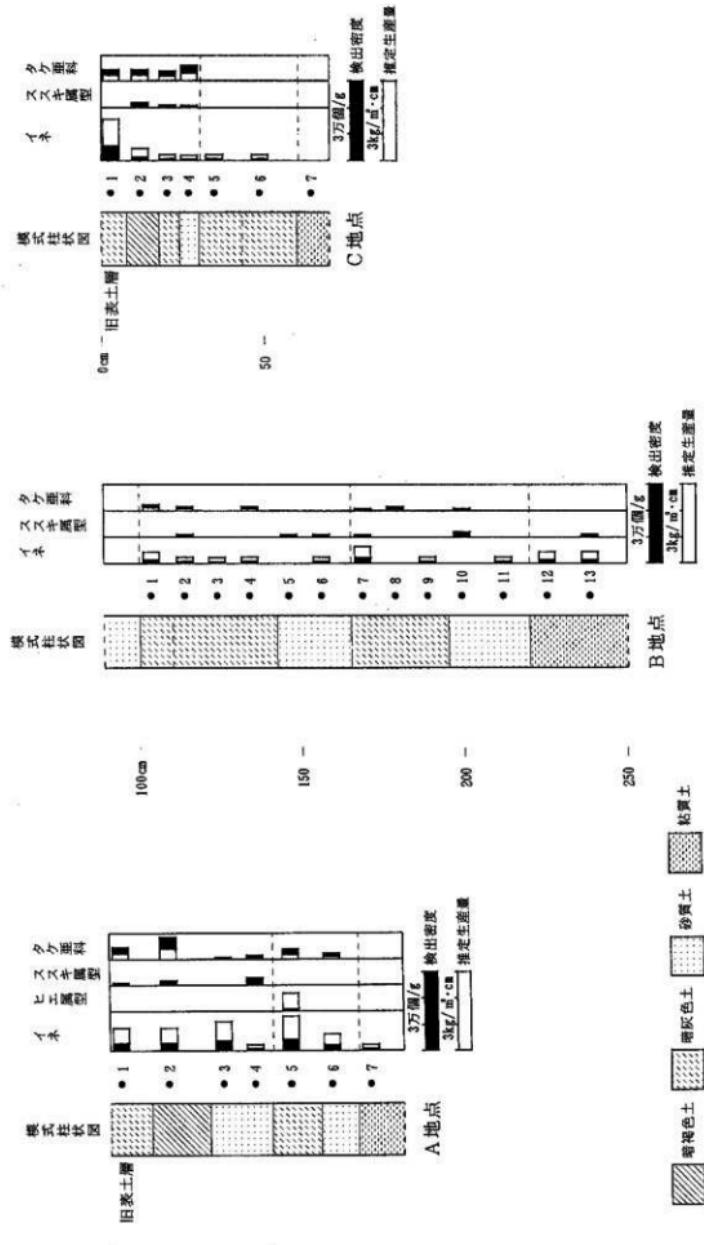
分類群	学名	地点・試料						C地点					
		1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	53	15	8	7	8	8	8					
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type												
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type												
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	45	45	38	60								

推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

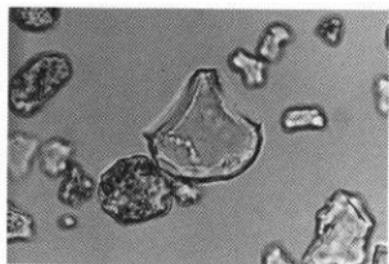
分類群	学名	地点・試料						C地点					
		1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.55	0.44	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22	0.22
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type												
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type												
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	0.22	0.22	0.18	0.29								

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

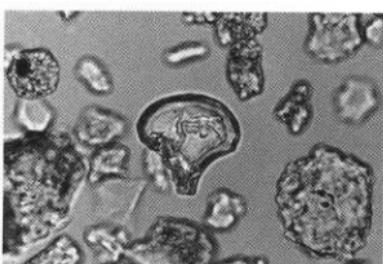
宮崎県西部市郷遺跡におけるプランクトン・オバール分析結果



植物珪酸体（プランツ・オパール）の顕微鏡写真



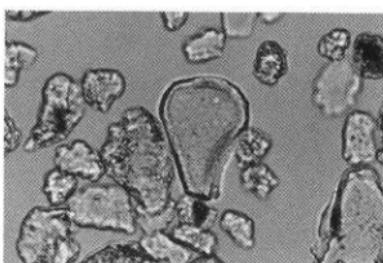
イネ（B地点）



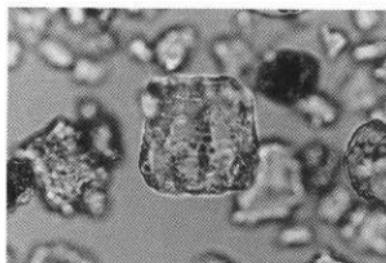
イネ（A地点）



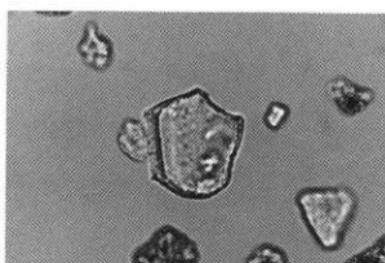
イネ（A地点）



ススキ属型（A地点）

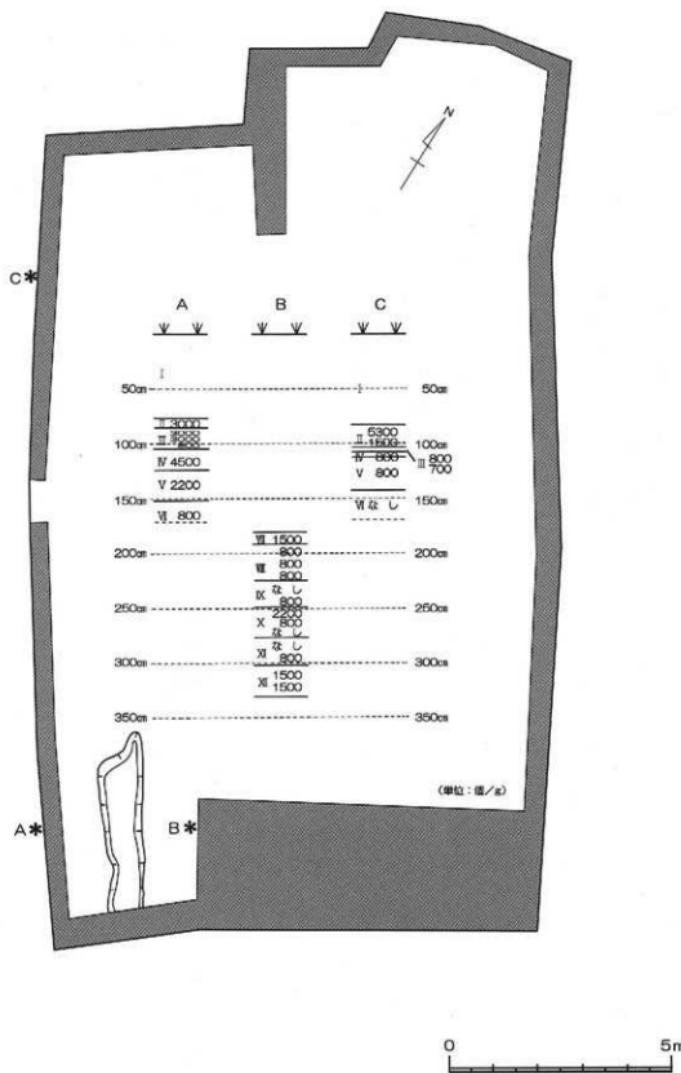


ネササ（C地点）



クマザサ（C地点）





第12図 プラント・オバール試料採取地点および分析結果

第V章 まとめ

鳴廻遺跡の発掘調査の結果、土坑5基と溝状造構1条及び遺物包含層が確認された。ここでは、調査成果について整理を行う。

遺構 土坑と溝状造構は掘り込み面が第IV層上面であり、ほぼ同時期に掘られたものと思われる。溝状造構については、自然科学分析結果からA地点（溝から西に1.5m）の第IV層から4,500個／gのイネのプラント・オバールが検出され、溝の掘り込み面と試料採取地点の高さがほぼ一致することから、水田耕作にかかる何らかの造構であると考えられる。土坑に関してはその用途や性格は不明である。

出土遺物 8世紀の青磁や瓦～近世の瓦が混在して出土した。これらの遺物については、この地を含む沖積平野底地部が一つ瀬川やその支流の氾濫による水害を度々被っていたことなどから推察すると、流れ込みの可能性が高いと思われる。

最後に、担当の力量不足から十分な調査ができなかったことは残念であるが、今後、この地を含む西都平野での水田をはじめとした生産遺跡の実態が明らかにされていくことを期待する。

【参考文献】

- 西都市教育委員会 1900『丸山遺跡』西都市埋蔵文化財報告書第9集
1991『上妻遺跡 石貫遺跡 寺崎遺跡 法元遺跡 酒元遺跡 堂ヶ島遺跡 童子丸遺跡』西都市埋蔵文化財報告書第14集
1992『新立遺跡』西都市埋蔵文化財報告書第18集
1996『西都原地区遺跡』西都市埋蔵文化財報告書第22集
1997『市内遺跡発掘概要報告書Ⅱ』西都市埋蔵文化財報告書第25集
1998『市内遺跡発掘概要報告書Ⅲ』西都市埋蔵文化財報告書第27集
2000『市内遺跡発掘概要報告書Ⅴ』西都市埋蔵文化財報告書第29集
佐土原町教育委員会 1996『下村窯跡群報告書』佐土原町文化財報告書第10集
宮崎県教育委員会 1998『市位遺跡報告書』宮崎県埋蔵文化財報告書第10集
日本貿易陶磁研究会 1998『貿易陶磁研究』No.1～No.5
中世土器研究会 1997『概説 中世の土器・陶磁器』
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財第49集

おわりに

最後に、調査中から報告書作成までの間、ご教示やご協力いただいた下記の方々と、発掘調査中、過酷な条件の下、作業に従事していただいた作業員のみなさんに謝意を表します。

青山尚友（県博物館）、石川悦雄、谷口武範、重山郁子（県文化課）、長津宗重、永友良典、菅付和樹、柳田宏一、鈴木健二、吉本正典、福田泰典、橋本英俊、日高広人、堀田孝博、松本茂（埋蔵文化財センター）、下田代清海（都城市教育委員会）、発掘・整理作業に携わった作業員の方々

（順不同・敬称略）

遺物 番号	種別	器種・部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調製・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	土器	杯 底部	5層				回転ナデ	回転ナデ	浅黃橙 (10YR8/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	精良	ヘラ切り
2	土器	杯 底部	5層				回転ナデ	回転ナデ	浅黃橙 (10YR8/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	精良	ヘラ切り
3	土器	杯 底部	5層		5.2		回転ナデ	回転ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (2.5YR6/6)	2mm以下の褐色 の粒を含む	ヘラ切り
4	土器	杯 底部	5層		7.8		回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰褐 (7.5YR6/2)	1mm以下の白色・ 褐色の粒を含む	ヘラ切り
5	土器	杯 底部	6層		6.2		回転ナデ	回転ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	3mm以下の褐色の 粒と1mm以下の白 灰色の粒を含む	ヘラ切り
6	土器	壺 口縁	6層				風化著しい	風化著しい	にぶい赤褐 (10R6/4)	橙 (7.5YR7/6)	4mm以下の褐色の 粒と3mm以下の灰 色の粒を含む	
7	須恵器	杯 口縁	5層				回転ナデ	回転ナデ	灰 (N7/0)	灰 (N7/0)	精良	鉄分付着
8	須恵器	杯 口縁	5層				回転ナデ	回転ナデ	灰白 (10Y7/1)	灰白 (10Y7/1)	精良	鉄分付着
9	須恵器	杯 口縁	5層				回転ナデ	回転ナデ	灰 (N7/0)	灰 (N7/0)	精良	鉄分付着
10	須恵器	杯 底部	5層		6.7		回転ナデ	回転ナデ	灰 (N7/0)	灰 (N7/0)	精良	鉄分付着
11	須恵器	杯 底部	5層		10.1		回転ナデ	指ナデ	青灰 (5B6/1)	青灰 (5B6/1)	精良	鉄分付着
12	須恵器	杯 底部	5層		6.1		回転ナデ	回転ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (N6/)	精良	鉄分付着
13	須恵器	杯 底部	5層				回転ナデ	回転ナデ	灰 (N4/)	灰 (N5/)	2mm以下の黒灰色 の粒を含む	鉄分付着
14	須恵器	壺 頸部	5層				横ナデ	横ナデ	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	精良	自然釉 鉄分付着
15	須恵器	壺 頸部	5層				指押さえ押え 後一部横ナデ	横灰 (5YR4/1)	横灰 (5YR4/1)	1mm以下の灰色 の粒を少し含む	鉄分付着	
16	須恵器	壺 底部	3層		8.8		回転ナデ	回転ナデ	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	精良	鉄分付着
17	須恵器	壺 頸部	5層				横ナデ	横ナデ	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	2mm以下の灰色 の粒を少し含む	鉄分付着
18	須恵器	壺 脇部	4層				格子目タキ	ナデ	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	精良	鉄分付着
19	須恵器	壺 脇部	5層				格子目タキ	平行当て具痕	灰 (N6/)	灰 (N7/)	精良	鉄分付着
20	須恵器	壺 脇部	5層				格子目タキ	ナデ	灰 (7.5YS/1)	灰 (N6/)	精良	鉄分付着
21	須恵器	壺 脇部	5層				格子目タキ	同心円当て具 痕後ナデ	灰白 (N7/)	灰白 (N7/)	精良	鉄分付着
22	須恵器	壺 脇部	5層				平行タキ	同心円当て具 痕	灰 (N5/)	灰 (N6/)	精良	鉄分付着

第2表 出土遺物観察表(1)

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法 量 (cm)		手法・製造・文様ほか		色 質		粘土の特徴	備考	
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
23	須恵器	壺	胴部	5層			格子目タキ	当て具痕上から一部ナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	精良	鉄分付着
24	須恵器	壺	胴部	5層			格子目タキ	同心円当て具痕	灰 (SY6/1)	灰 (SY6/1)	1mm以下の灰白色の粉粒を少し含む	鉄分付着
25	須恵器	壺	胴部	5層			格子目タキ	同心円当て具痕	灰 (SY5/1)	灰 (SY5/1)	1mm以下の灰白色の粉粒を少し含む	鉄分付着
26	須恵器	壺	胴部	5層			格子目タキ	同心円当て具痕後ナデ	灰 (SY6/1)	灰 (SY6/1)	やや不良	鉄分付着
27	須恵器	壺	胴部	5層			格子目タキ	不定向の平行当て具痕	灰 (SY6/1)	灰 (SY7/1)	精良	鉄分付着
28	須恵器	壺	胴部	5層			平行タキ	ナデ	灰 (N5/1)	灰 (N5/1)	精良	鉄分付着
29	須恵器	壺	胴部 (SC4)				格子目タキ	ナデ	灰褐色 (SYR6/2) 灰 (N6/)	灰 (N4/)	1mm以下の黒灰色と微細な灰色粒を含む	鉄分付着
30	須恵器	壺	胴部	6層			格子目タキ	同心円当て具痕後一部斜方角のハケ目	灰白 (N8/)	灰白 (SY7/1)	精良	鉄分付着
31	須恵器	壺	胴部	6層			平行タキ	平行當て具痕	綠灰 (7.5GY6/1)	灰白 (N7/)	精良	鉄分付着
32	須恵器	壺	胴部	6層			格子目タキ	同心円当て具痕	灰 (SY5/1)	灰 (N7/)	精良	鉄分付着
33	須恵器	壺	胴部	6層			平行タキ	平行當て具痕	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	精良	鉄分付着
34	須恵器	壺	胴部	6層			格子目タキ	同心円当て具痕	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	精良	鉄分付着
35	青 磁	皿	底部	5層	4.6		施釉 貫入	施釉 貫入	灰オーリーブ (7.5Y6/2)	灰オーリーブ (7.5Y6/2)	精良	
36	青 磁	碗	体部	5層			施釉 貫入	施釉 貫入	オリーブ黄 (5Y6/3)	オリーブ黄 (5Y6/3)	精良	
37	青 磁	碗	体部～底部	5層			施釉	施釉	灰オーリーブ (5Y5/3)	灰オーリーブ (5Y5/3)	精良	
38	青 磁	碗	底部	5層			施釉	施釉	灰オーリーブ (2.5GY6/1)	灰オーリーブ (2.5GY6/1)	精良	
39	青 磁	碗	底部	5層	7.9		施釉	施釉	灰オーリーブ (5Y6/2)	灰オーリーブ (5Y6/2)	精良	
40	青 花	碗	口縁	5層	10.6		施釉 染付	施釉 染付	灰白 (2.5GY8/1)	明青灰 (SB7/1)	精良	
41	青 花	皿	口縁	5層	12.0		施釉 染付	施釉 染付	明綠灰 (10GY8/1)	灰白 (2.5GY8/1)	精良	
42	東播系	こね鉢	口縁	5層	11.5		ナデ	ナデ	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	精良	
43	陶磁器	碗	体部下半	5層			施釉	施釉	灰白 (SY7/2)	灰白 (SY7/2)	精良	
44	陶磁器	壺	胴部	5層			施釉	施釉	灰 (7.5Y6/1)	黑褐 (10YR3/2)	精良	

第3表 出土遺物観察表(2)

遺物 番号	種 別	器種・部位	出土 地點	法 量 (cm)		手法・調製・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考	
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
45	瓦質土器	培塔 口縁	5層				横ナデ	横ナデ	暗赤褐色 (5YR3/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	1mm以下の板色・赤褐色の粒と3mm以下の白色半透明の粒を含む	
46	瓦質土器	鍋 口縁	5層				ハケ目	ハケ目	灰青褐色 (10YR6/2) 灰褐色 (7.5YR4/2)	灰青褐色 (10YR6/2) にぶい黄褐色 (10YR4/3)	1mm~3mmの板色透明の粒と黒褐色~4mmの白色不透明な粒を含む	
47	瓦質土器	羽釜 口縁	5層				ナデ	ナデ	灰白 (5Y7/1) 黑 (5Y2/1)	灰白 (5Y7/1) 黑 (5Y2/1)	1mm以下の黒色と灰色の粒を含む	内外面スス付着

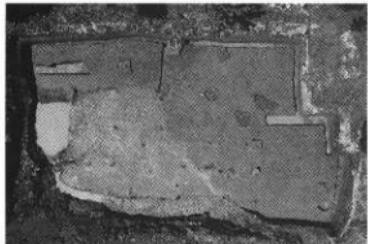
瓦観察表

遺物 番号	種 別	出土 地點	文様及び調製		焼成	色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
			凹 面	凸 面		凹 面	凸 面		
48	平 瓦	4層 布目後ナデ		工具ナデ	良 好	灰 (N4/1)	黑 (5Y2/1)	2mm以下の灰白色の粒を少し含む	
49	平 瓦	4層 ナデ		格子目タキ	良 好	灰 (10Y5/1)	灰 (N6/1)	2mm以下の灰白色の粒を含む	

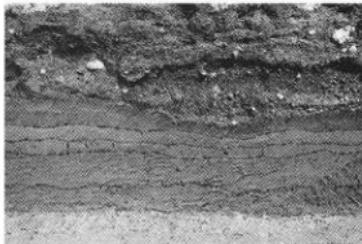
フイゴの羽口計測表

遺物 番号	種 别	出土 地點	法 量 (cm)				色 調		胎 土 の 特 徴	焼成	備 考
			現長 (cm)	内径 (cm)	最大径 (cm)	重 (g)	内 面	外 面			
50	フイゴの羽口	6層	4.0	1.2	6.0	30.0	灰白 (N7/1)	灰青褐色 (10YR8/4)	1mm以下の灰色砂粒を含む	良好	スス付着

第4表 出土遺物観察表(3)



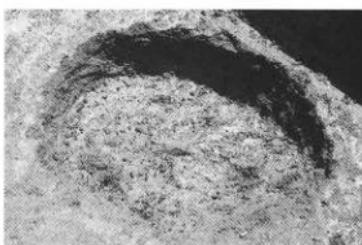
調査区全景（垂直）



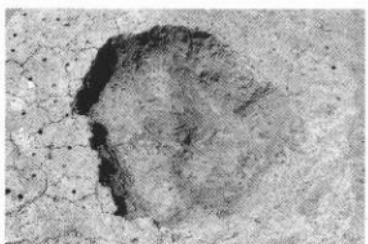
土層断面



SC1・SC2・SC3完掘状況（左→右）



SC4完掘状況



SC5完掘状況



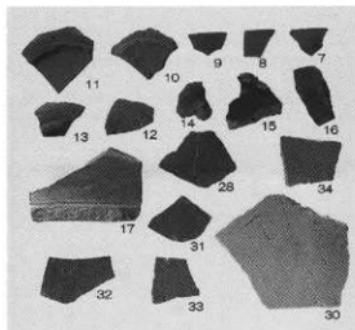
SE1完掘状況



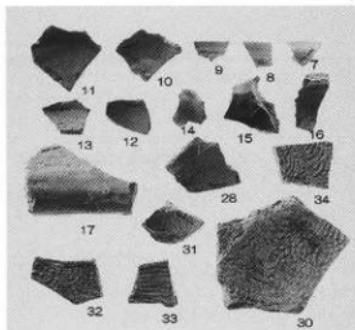
作業風景（6層掘り下げ）



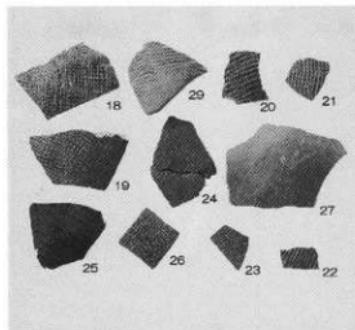
水没（数回）



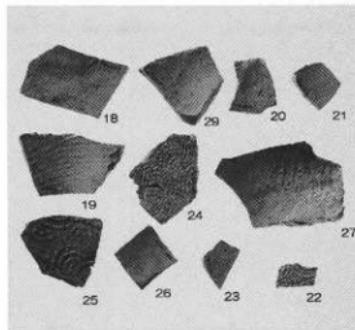
外 面



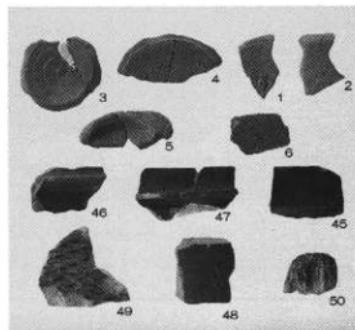
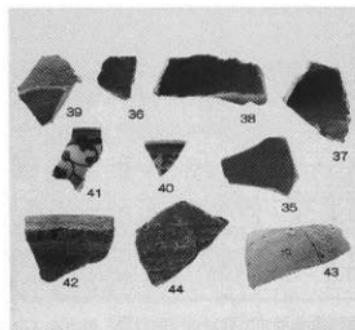
内 面



外 面



内 面



報告書抄録

ふりがな	しまめぐりいせき						
書名	嶋廻遺跡						
副書名	西都簡易裁判所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第36集						
編集者名	南正覚 雅士						
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171						
発行年月日	西暦 2001年3月9日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 °'."	東経 °'."	調査期間	調査面積	調査原因
嶋廻遺跡	宮崎県西都市大字右松2519-1	45208	32度 06分 09秒 付近	131度 24分 31秒 付近	19980709 ~ 19980827	200m ²	西都簡易 裁判所建 設に伴う 事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
嶋廻遺跡	散布地	古代		須恵器			
		中世	溝状遺構 土坑	土師器 陶磁器 瓦			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第36集

嶋廻遺跡

西都簡易裁判所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月9日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985 (36) 1171

印刷

株式会社 サンリスロ

〒880-0021 宮崎市清水2丁目3番3号
TEL 0985 (29) 9482
